HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	都市化にともなう Rurality の変性（Ｖ） ： その一般化と結論
Author(s)	金田, 弘夫
Citation	北海道大学農經論叢, 32, 20-39
Issue Date	1976-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10907
Type	departmental bulletin paper
File Information	32_p20-39.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

都市化にともなう Rurality の変性（V）

―その一般化と結論―

金　田　弘　夫

目　　次

Ⅰ　序……43
Ⅱ　方法論上の独自性と戦略的枠組……44
Ⅲ　都鄙二分法概念の吟味……48
Ⅳ　連続体説に対する≪meta≫概念の導入……51
Ⅴ　≪iso≫概念の投入による転回……58
Ⅵ　むすび……59

Ⅰ　序

この研究において，私は Rurality を農村社会体系と農民行動の特性をあらわす一つの指示概念として取扱ってきた。その Rurality が都市化や産業化の進展にともなって，どのように変性したか，この点を実証的に解明しようとしたのが本研究の狙いである。

ところで，この研究を展開してから，既に5年の才月が流れた。この間，石油ショックを契機として都市化・産業化の原動力とみられる経済の高度成長にもようやく一つの転機があらわれ，これに代って，安定成長や生活優先或ひは生活福祉が叫ばれるようになった。そこに時代の変遷の一つの大きな波がみられるが，社会変動を論ずる場合，むしろこのような巨大な変動の波を経験的素材にしてこそ，その本来の考察の意義を深めることが出来ると思われる。しかしながら，過去5年にわたる本研究は，むしろ高度経済成長が進展する過程にあって，これに平行してあらわれた Rurality の変容の諸相をその考察の主眼においてきた。従って，ここではこのような経済情勢の変化

を契機として，とりあえず一応のしめくくりを展開し，これによって爾後の段階にあらわれる変化に対する理解の素地をかため，また比較の素材とすることが望ましいと思われる。

このような理由から，本稿においては，今までに集積した Rurality の変性をめぐる数々の情報を整序し，これを一般化するために，これら一連の現象を説明する独自の論理の展開につとめ，また残された問題点についてもこれを明らかにし，今後の研究の指針とすることにした。

このようにして，本稿は今迄5ヶ年にわたって継続してきた一連の研究の結論にあたる。しかし，本稿における結論はあくまでこの研究でとりあげた課題の性格やその独自の方法によってもたらされた一応の終着点であって，従って，農村をもっと歴史の長い展開過程においてその変遷を論ずるとすれば，本研究はその些やかな一里塚にすぎず，またここでの結論はあくまで当座の仮の決算にすぎないものと思われる。

II　方法論上の独自性と戦略的枠組

本研究のあとを振りかえってみて，はじめに省察しなければならない事柄は，その方法論上の独自性と戦略的枠組についてである。

ここでは，前述の如く主格概念としての Rurality を農村社会の諸特性を指しめす包括的な指示概念として設定したが，何が Rurality の指示内容であるかについては，はじめから一義的な規定を施さなかった。勿論，このような主格概念に対して，それに対応した指示内容（referents）を与えることは，極めて重要であり，またその規定内容を既存の農村社会学の諸理論に求めることもさして困難ではない。[1)]

しかしながら，本研究でははじめから既存の理論の中から指示内容を求めることなく，≪Rurality≫と≪変性≫という二つの概念を次のように取扱い，独自の戦略的枠組を設定した。すなわち，

1）Rurality の概念に経験的な指示内容を与えた例としては，P. Sorokin の都市界対農村界の8つの複合的な差異概念をはじめ，その著書に散見される規定があげられるほか，L. Wirth の Way of Life にみられる Rurality と Urbanity，我国の鈴木栄太郎の自然村の概念にみられる Rurality 等があげられる。また古くは明治40年，木下義道著の「田舎の日本」にもみられる。

(1)　ここでは Rurality を農村における行為の三つのコンパートメントである≪生産≫と≪生活≫と≪文化≫の局面にあらわれる相互関連的な行為と意識と感得の特性であると規定し，このうちとくに≪生活面≫にあらわれる行為の特性を≪狭義の Rurality≫として，主にこれに重点をおくことにした。この場合，ここではこの生活の領域にあらわれる Rurality について，従来の社会変動論において屢々取扱われてきた所謂，構造論的接近や，社会関係論的な接近による枠組から一歩離れて，行動論的なアプローチの仕方によってその独自の展開を試みることにした。このことは，構造論や関係論の中から求められる Rurality の指示内容を否定するものではなく，それはそれとして，行為を基調とした行動論的な社会構造の特色を改めて農村に求め，これを通じてその行為の体系にあらわれる特性としての Rurality に独自の経験的な指示内容を与えようとする意図にもとずくものである。

(2)　次に，Rurality の≪変性≫（degeneration）についてであるが，従来，社会変動論においては，変動は単なる推移・発展・成長とは区別されるそれ以上のものとして取扱われてきた。とくに全体社会については，変動はその広い歴史的視野のなかでとらえられるような大規模な変化を指しているものとみられる。変化という観点からすれば，社会はたえず変遷，流転するものであって，その諸相は多様である。これを進歩とみるか発展とみるか，或いは同じ過程を繰り返えす波動や循環の一局面とみるかによってその意味も変わってくる。この点について，本研究では，全体社会の変動からしばらくはなれて，とくに対象を小規模な特定の農村社会に絞り，それを単位として，≪変わるものはその Rurality である≫とする作業仮説に立脚して，実証的な分析を展開することにした。

ところで，この Rurality はここでは上記のごとく，農村における≪生産≫と≪生活≫と≪文化≫の三つの複合的な行為の体系にあらわれる≪可変的な特性≫として取扱われている。しかも，この特性の可変性には色彩の変化にも似た次元における変化が包摂される。Greenish な色彩が屢々農村を表象する表現として用いられるごとく，いま仮りに Rurality を greenish な色彩であらわす比喩が許されるとすれば，都市化・産業化の衝撃によって，そこに生ずる greenish な色彩の変化は多様に発現する。それが≪進歩≫であるか≪発展≫であるかはしばらくおくとして，そこでは，ある部分が≪退色≫と

なってあらわれ，またある部分は≪混色≫となってオーバーラップするような変色の無限の可能性の発現が予定される。このような特性のもつ無限定な可変性を予定するとき，そこに≪変性≫という従属概念の設定が必要になり，また可能となってくるのである。

もとより，Rurality の変性は単なる色彩の変化とは本質的に異なる人間行動の有機的な体系のもつ構造的機能的定型的特性の変化であり，しかも，その変わり方には意味が付着する。また，万物は流転するというけれ共，農村には，それぞれの個性と特殊性（個別性）をもちながら，なおどうしても変らない恒常的な部分と，比較的容易に変わる部分とを持ち合せている。さらに進歩が退化を随伴し，逆に退化が進歩を促進するような過程を経ながら，漸次その Rurality を変えていくこともあれば，急激にその全部を失うこともありうる。

このようにして，Rurality を変わるものとして，そこに様々な変相のパターンとそれに付着した社会的又は歴史的な意味の多様な変容を考慮に入れるとき，ここに≪変性≫なる概念が単なる変化とは異なる変異の諸様式や変相過程の諸特性を表わす概念として独自の意味をもつことになる。また，Rurality は屢々 Urbanity との対比において取扱われるが，上述の如き意味において変性概念を設定すれば，そこから従来屢々論じられてきた所謂≪都鄙連続体説≫（the Rural-Urban Continuum Theory）とは異なる新らしい連続体説の展開を促がす可能性が認められることになる。本研究の狙いの一つもまたここにもある。

(3) ところで，Rurality の変性の事実を所与の農村社会における行動特性を対象として比較分析的にとらえようとするとき，その分析に含まれる現象と現象相互間の関係が測定可能であることが要求される。このことは当然の要求であるが，更にこの要求との関連において，次に必要とされることは，選択された対象農村を一定の時点を隔だててパーネル・スタデーによって把えること，すなわち現象を≪昔と今≫という形で比較検討する方法をとり入れることである。

2）≪Rurality の変相のメカニズム≫については，本論集第27集本研究のⅡ（94頁）に，その概念的な構成を展開しておいた。しかし，モデルによってその実態的な関連を示めす一般図式の展開には至っていない。

このはじめの事象を測定可能なものとして取扱わねばならないという要求は，当然のことであるにも拘らず，今日未だにこの要求を充分みたす方法が確立しているとは限らない。次のパーネル・スタデーの導入についてであるが，この方法は，E. M. Rogers も指摘している如く[3]，社会変動を一般化するに当ってその実証的な吟味を展開する方法として極めて有効な方法の一つと思われる。しかし，所与の農村における変動の事実を測定可能な条件において，昔と今という形で調査するには実際にかなり多くの困難がつきまとう。この点は E. M. Rogers 自身も認めるところであり，従って彼はこの方法の導入をあきらめて，センサスのような二次的な統計資料を素材に求め，これを分析することによって農村の社会変動の趨勢をとらえる方法をとっている。[4] この方法も可成り有効な方法と思われるが，しかし，変動の視軸が巨視的になり過ぎて，個々の農村において発現する Rurality の変性の如き個性的な現象を詳細にとらえることが出来ないという欠陥がつきまとう。

このようにして，ここでは課題のユニークさを裏書きする二つの方法論上の要件を如何にして充たすかという戦略的な問題が残る。この問題について本研究においては，この双方の要件を一挙にして充たすような独特の方法をとり入れることにした。すなわち，≪Community Solidarity≫ と ≪Socio-Economic Status (S. E. S.) の測定方式をとり入れ，これによって得られたデーターから Rurality の変性の実態を解明する方法である。本研究ではこれ

3) E. M. Rogers は，この点について，≪時点を異にして行われるパーネル・スタデーは恐らく変動の研究を展開するには最もよい調査様式（research design）であろう。しかし，時間的に昔と今という形で制禦して行われるパーネル・スタデーの実例は，農村社会における変動を取扱ったものとしては文献的にも極めて稀である。≫と述べている。

Olaf F. Larson & Everett M. Rogers, "Our Changing Rural Society", Iowa State Univ. Press., 1964, P. 39.

4) E. M. Rogers は，アメリカ農村の社会変動の分析に当って，はじめに「伝統型」と「近代型」という二つの理念型を設定し，アメリカ農村が前者から後者へと体系を変えつつあることを明らかにし，このことをセンサスの分析によって得られた次の7つの項目によって実証している。即ち，1. 1人当り農場生産性の向上と農場人口の減少，2. 非農場セクターと農場セクターの連繋の増大，3. 農業の専門化，4. 農村と都市の価値観の相違の減少，5. 農村人の社会関係におけるコスモポリタン化，6. 農村における中央集権化，7. 農村における一次的社会関係の重要性の低下と二次的社会関係の重要性の増大。E. M. Rogers 前掲書 pp. 42～59。

を都市化の影響を最も顕著に受けた北海道の農村集落と然らざる集落に適用して比較するとともに，なおその一部については15年前（昭和30年）に実施した同じ農村集落を再度調査して比較することによってパーネル・スタデーを展開することにした。もっとも，Rurality がこの15年間に変わったとしても，その変わったと称せられる時点において，果して都市の生活面における Urbanity との間にどれだけ近似性があるか，この点の吟味を抜きにしては都市化は確認されたことにならない。そこで本研究においては，都市化の顕著な農村集落と都市部町内とを素材として，クロス・セクショナルな比較分析を展開した。また，調査結果得られたデーターについては，その妥当性を吟味し，また分析結果の精度を高めるために因子分析その他の手法を導入することにした。

本研究における方法論的基礎とその戦略的枠組は概ね以上のごとくである。そこで，次にこれによって得られた Rurality の変性をめぐる諸般の事実を如何に整序し，また如何に説明するか，その一般化に役立つ論理の展開を試みることにする。

Ⅲ　都鄙二分法概念の吟味

Community Solidarity と Socio-Economic Status の測定を媒介として，所与の農村における Rurality の変性の諸相を解明している過程において，次第に明らかになってきたことは，Rurality と Urbanity との間に微妙な Overlapping 或いは Melting の事実が認められることである。また，この事実に加えて，Rurality の変性には都市化に対する農村側の≪偏在変性≫や≪差次感受性≫の如き特異な受容特性の存在を物語る多くの発見的実事が存在することが指摘される。これら一連の事実については，既に前四稿において詳しく述べたので，ここでは繰り返し述べないが，ここで問題となることは，これらの微妙な変性をめぐる諸事実を如何なる統一的原理によって説明し，また理解するかということである。

その行為と意識と感得の agrestic にして rustic な特性をもって Rurality とする場合において，今もし都市化の影響によって Rurality の上に Urbanity が overlap したとすれば，果して Rurality は次第にその特色を喪失し，遂

には完全に Urbanity によって代置されてしまうものであろうか。このような理解がもし可能であるとすれば，それは一種の≪形質転換≫を意味することになり，Rurality の形態と実質とが全面的に Urbanity によって移しかえられてしまうことになる。しからば，果して，このような事実が認められるであろうか。本研究の範囲内でこのような判断が許容されると思われるところは，北広島町内の道営住宅団地のような一部の限られたところのみである。同町の他の地点にも可成りの変容は認められるが，しかし，かっての純農村北広島町に存在した Rurality が全面的に Urbanity によって代置されてしまったということは出来ない。これと同時にまた，かって存在していた北広島農村の条件発生的な≪元型≫（geno-type）としての Rurality が全く無疵の状態で維持されているということもできない。これにやや近い状態にあるのは同町の≪中の沢（N_2集落）≫位のものであるが，これとても更に都市化が進めばその Rurality は可成り変容するものとみられる。その変化はむしろ≪Rurality の Melting≫に近いが，しかし，それは Urbanity による全面的な代置とは認められないし，またこれを Rurality の単純な形質転換であるとして処理することも出来ない。

このような Rurality の変性の実態は，単純な転換や代置としてではなく，むしろ極めて連続性をもった微妙な変容現象として把えなければならない。もし然りとすれば，この現象を従来の所謂≪都鄙連続体説≫によって，果してどこまで説明することが出来るであろうか。≪農村≫と≪都市≫という二つの類型概念を設定し，これをそれぞれ直線上の両極において，都市化された所与の農村をその中間に求めて説明しようとする従来の連続体説は，所謂二分法的な先験論理を基調としている。この学説は直線上の二点間に第三点があるとき，その直線は連続的であるという定理を前提にして成り立っている。従って，この直線を二つに分ける時，その一方にはその分割を定めるためにとられた極点が常に存在していることになる。

しかしながら，本研究を通じて把えた Rurality の変性をめぐる諸事実は極めて多元的な現象であり，また複合的であって，従来のこの理論になじまない点が多々認められる。それはこの理論の論理構成がもつ次の如き限界に基因すると思われる。

(1)　先づ，≪農村≫と≪都市≫という類型，或いはその亜類型としての

≪伝統型≫と≪近代型≫（ロジヤース），≪Familistic-Gemeinschaft≫と≪Contractual-Gesellschaft≫（ルーミス・ビーグル）等々この種の多くの両極概念の設定は，確かに論理的には設定可能である。しかしこれ等の類型概念が純粋概念であり理念型であるだけに，はじめからこれらのすべてについて，完全に符合する実例を見出すことは困難である。また論理そのものの正当性を実証する社会的事実が存在する間はよいが，その事実が多元的に変化してくると，もはやこれになじまなくなるという欠陥がみられる。ただ設定された類型を基準にして現実がそれからどれ程離れているかを判断することは出来る。しかし，この場合においても，その基準としての理念型の精度をあげればあげるほど，その極点に位置ずけられる農村や都市は現実には増々発見困難になり，またそれは極点から次第に離れてしまうという矛盾が生ずる。

(2) 次に，この理論においては，直線を二分したとき，その一方には常にこれを可能ならしめる極点が一つしかないことになっている。従って，都市と農村が両極を形成している場合，一方の極点の外側に新らしい極点が形成されることは絶対にあり得ない。また両極は常に排他的対蹠的であって，双方が互に作用し合って≪共変≫するようなことはない。

しからば，社会的な≪極≫としての農村や都市は果してこのような性格のものであろうか。現実において両者はなお常に流動的発展的であって，都市側には第三の極の如きメガロポリスやアクアポリスの如き新らしい形質の都市の出現が考えられるし，また農村側には考古学の発達によってなお数千年以前に遡ぼる農耕生活の存在が認められるとすれば，直線上の両極はこれを書き直すか，或いは極の外側に新らしく極を置かざるを得なくなり，従って二分法はもはやこの様な歴史的現実に対応出来なくなる。

(3) Ruraliy や Urbanity を説明する分析的用具として従来の連続体説は或る程度の力をもっている。しかし，これによって個々の都市，個々の農村の性格或いは個性の違いを説明するには限界がある。また都市化がかなり進展した農村であっても，それが自発的な変化でない以上，或る事態の発生を契機として，忽如として生々しい Rurality が再生・再燃するという事実が存

在する。[5] これによって農村が連続体の線上を右往左往するということになると，連続体説では このような浮動性を 充分処理しえないのではないかという疑問が生ずる。

以上の如く，従来の連続体説にはその二分法や 理念型的な概念構成のもつ限界の故に，Rurality の変性の如き現象は，これを充分説明し得ないのではないかという問題が残る。そして，その限界の外側に横たわっている問題は，要するに metasociological な性格をもった問題ではないかと思われる。従って，ここで必要なことは，従来の連続体の全面的な否定でも否認でもなく，これを超えて新らしい連続体説を meta-sociological に発展させることである。その為には，従来の連続体説の中にみられる meta-sociological な問題点を具体的に明らかにし，これを解決する独自の logic の展開につとめ，更にその logic の正当性を本研究において把えた調査事実によって 確認することが必要と思われる。

Ⅳ　連続体説に対する≪meta≫概念の導入

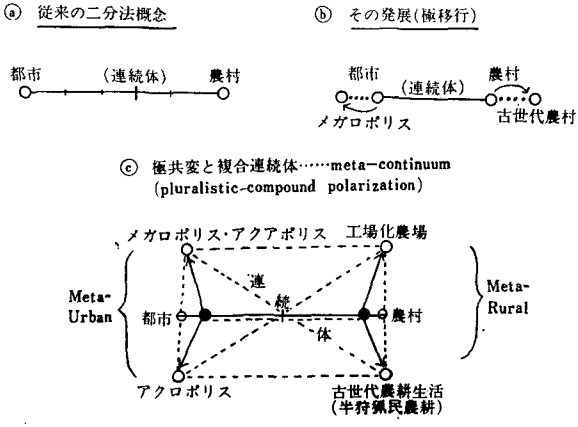
前節において提起した連続体説をめぐる meta-sociological な諸問題を解明する最も有効な方法は，事実に対して概念の使い方を 充実させることであり，この場合，二極概念に対して meta 概念を導入し，これを基調にして連続体説を再構成することである。以下，その要旨についてのべる。

まず，都鄙二分法概念に meta 概念を導入すると，両極概念の共変と既存の両極を超えた多元的な両極の分解（the pluralistic-compound polarization）がおきる。これを平面で図式化することは容易でないが，理解を容易ならしめるためにあえて表現すれば，第 1 図の如くなる。

第 1 図のⓐは≪従来の二分法概念≫による連続体である。この概念によれば，前述の如く，直線が二片に分けられるとき，その一方には常に一つの極点が定位し，これが二つになることはない。しかしⓑ図では，メガロポリスの出現や 古世代農耕生活の発見によって，その外側にもう一つの新らしい極

5）北海道の典型的な稲作農村である≪北村≫農村は，ここ十数年の間に可成り都市化が進んだ。しかし，昭和50年 8 月の 6 号台風による災害を契機として，はからずも Rurality や Agriculturalism が甦えり，再燃した事実がある。

第1図　都鄙両極概念のメタ現象



を設定せざるを得なくなる。その結果，現在存在している農村や都市は連続体の中間におかれることになる。また Way of Life を基調とした Rurality や Urbanity の理想型も同様に極点としての位座を保つことが出来なくなり，それぞれ連続体の内側に位置づけられることになる。第1図のⓒ図はこの極点を多元化し，多極化によってもたらされる連続の次元の中にあらわれる農村と都市の位置をしめしたものである。実線はその実態関連を示めし，破線は連続体を示めしている。

これによっても明らかな如く，従来の連続体の都市側極点の上に，メガロポリスやアクアポリスの如き新らしい極点を設定すると，それに対応した形で，下方の極にアクロポリス（acropolis）が極点を形成することになる。同様にまた農村側にも新らしい極点として工場化農場や古世代農耕生活が上下に両極を形成し，現在理念型とされている≪農村≫はその中間に定置される形になる。かくして両極は分解して，この多極化された都鄙の図式に複雑な次元の連続体が発現する。

とくに，注目すべきことは≪メガロポリス≫と≪古世代農耕生活≫が両極を形成して連続しながら，別にこれと交叉した形で≪アクロポリス≫と≪工場化農場≫を両極とする連続体が発現し，更に，従来の≪農村≫や≪都市≫

7）≪アクロポリス≫は，古代ギリシヤの都市の中央にある城砦であるが，ここでは古代都市一般を象徴的に表現するためにこの語を使用することにした。

が切り替え点になって途中で折り返えしの連続体が生ずることである。

このように極そのものが≪折り返えしの標柱≫（metapole）となって別系統の連続体が発現する論理は，meta の所産である。また，両極がそれぞれの歴史の段階において左右に対応した独自の極相を形成しながら≪共変≫することも meta 論理の独自の所産である。第1図で示めした両極の構成は平面で描写されているが，その本来の構成はむしろ立体的に表現した方がより的確であろう。しかし，正確に表現しようとすればするほど複雑になって不明瞭な表現になり，遂には混沌とした表現に陥入ることは避けられない。従って視覚に訴えてこれを表現することはむしろ慎まねばならない。

これを要するに，極く一般的な水準からすれば，存在するものはそれ自体直観的乃至は直覚的な連続性をもっており，その連続性はリニアな線上において発現する連続体を超えたものであり，また集合論的な平面にあらわれる連続体とも異なり，これを超えた次元において発現する。それは常に思惟の中においてのみ了解される可能性をもったものであり，前述の如く視覚に訴えて表現しようとすればかえって混沌におちいるきらいがある。しかし，≪定在≫そのものがそれ自体観念化の体系と現象の秩序との対応である以上，曖昧模糊とした現象には混沌とした観念が対応するのは当然である。これを超えて理解を明確ならしめるためにはトポロジーやカタストロフィーの論理の適用が有効であるかも知れない。

ところで，上述の如く，多元的な連続体の設定を予定した場合，他方，都市化産業化の影響を受けた Rurality の変性の側には，果してどのような meta 的現象が認められるであろうか。

都市化・産業化の進展或いは衝撃によって所与の農村の Way of Life として Rurality が激しく変容したことは，本研究の調査事実によって既に明らかなところである。その中で，とくに指摘しなければならないことは，都市化による農村生活方式の変容が，生態学における≪変態共生≫（meta-biosis）[8]に類似の現象とみられることである。すなわち，都市化の進展によって農村民

8）≪変態共生≫（metabiosis）という概念は生物学の領域において存在する概念であるが，果してこのような現象が成り立つかどうか，生物学の領域でもいまだ確認されていないといわれている。しかし，社会学的には含蓄のある概念である。

がその生活環境を都市に依存する≪meta-biolic≫な生活方式がそれである。その行動様式の変化の過程には，明らかに Rural なものが Urban なものに複合的に依存しながら変化していく特色が認められる。これについて，思考実験を試みるとすれば，このような生活行動特性の変化は，≪体温の変化による変色≫，すなわち≪meta-chromatic な変化≫に類似の現象とみられる。農民のもつ行為と意識と感得の特性の変化が，このような≪変色≫となってあらわれるのは明らかに meta 現象である。前述の如き greenish な変化が単なる加色による変化と異なる所以もまたここに認められる。

このようにして，都市化による Rurality の変性には，これを≪meta-biolic≫にみなければならない根拠が認められるが，しからば，都市側における Way of Life としての Urbanity はどうであろうか。果して，都市化，産業化の影響による≪変態共生≫の如き現象が都市側にもみとめられるであろうか。

都市化が最も顕著に進んだ社会こそほかならぬ現代都市である。高度経済成長下にあった都市の生活の実態は，都市の都市化により往時の都市のそれと著るしくその趣をことにしている。

そこで行動する最も象徴的な存在こそ各種企業経営体の≪業者≫といわれる存在にほかならない。これらの業者の中には農村出身者もかなり多数みられるが，彼等はそれぞれ如何なる企業に所属するかを別とすれば，その出身は問われない。彼等の行動の原点には利潤極大化の理念が絶対化された形で横わっており，彼等はそれを求めて，マンモス化した巨大な都市をテリトリーとして連日ワンダーリングする。時にはそのシステムを通じて，都市の範囲を超え，全国・全世界に向ってワンダーリングすることもある。その行動様式の特性は，かつての半狩猟民のそれを思わせるものがあり，彼等は≪えもの≫を求めて巨大な都市を山野の如く抜渉する。その行動を彩色する気風は，むしろ≪agrestic≫（粗野）であって，そこには≪みやびやかさ≫などはなく，狩猟民のそれに似て rustic なものに通ずるものがある。これに加えて，これら業者的存在の多くは核家族を世帯としたベットタウンを郊外にもっている。この地域は，今日所謂 Rural-Urban Fringe（都鄙接触体）などと称せられているが，本来その多くは明らかに農村部に属する所であり，今日でも祭りや昔のボス的存在の出現によって，その Rurality が屢々顕示される。

彼等はこの農村を生活環境とし，夜間はこれを≪ねぐら≫として過すが，この間，都心部は，殆んど住むものがなく≪死の街≫と化し，ただ施設の置き場にすぎないものとなる。重層したコミニュテーに対する彼等の帰属感（identification）や愛着心は分裂的となり一体化しない。むしろ，自己の企業組織体に対する帰属感やRoyalityの方が優位にあるが，これとても絶対ではない。これら一連の行動特性は，本研究における Community Solidarity の調査結果の中にも明瞭にあらわれている。

ところで，このことは彼等の生活行動のパターンが極めて≪移動的≫であることに由来すると思われる。すなわち，その所属する企業体が都市を拠点として，全国・全世界各都市に支店や出張所を設け，これを結節機関として人事の交流をはかるとき，その人事の対象になる者にとって，都市は勿論のことマイホームもまた仮住い的存在でしかない。また成長下にあっては彼等はいつでも転業・転職の機会が介在している以上，彼等は極めてmobilityに富んでおり，流民的である。定住性に乏しい彼等にとって，その居住の継続性は，半狩猟民のそれの如く，≪semi-permanent≫であると云わねばならない。このような理由から，都市に対する彼等の土着性や帰属感は，稀薄になり勝であるが，その生活の便宜性や効率性或いは都市機能のメリットに対する追求欲は旺盛であって常に厳しい批判をともない，それがその都市に対する評価となってあらわれるから，都市に対する一体感の如き情緒は生れにくいのである。

このようにして，都市化の進んだ都市における尖鋭的な≪業者≫の行動特性には，可成り半狩猟民のそれに似たものを見出すことができる。そこには，かつての≪都人≫が保持していたような優雅な Urbanity はみられず，むしろ agrestic な特性がむき出しになっていて，時には rural なものと区別しがたいものとなる。

この事は，都市側にも≪変態共生≫に類似の現象が存在していることを物語っている。従って，前述の如く，Rurality の変性が≪meta-biolic≫であるとしても，それは農村側においてのみならず，都市側においてもまた同様であることが明らかであり，かくして，この変態共生的な特色は都市化社会の共通の特色であるということになる。

以上ここでは，Rurality の変性[9]の実態について，これを説明するためにmeta 概念の導入を試み，その実質的意味について明らかにした。ところで，変わるものは Rurality であり，その Rurality に，顕著な都市化現象がみられるとしても，それはあくまで都市化・産業化の衝撃によって Rurality が激しく振動する側面のみを取り上げているのであって，そこには復元力が潜在しているかも知れない。その振動の本源が，あくまで外生的要因に基ずくものであり，農村の内部から自生的に創成されたものでないとすれば，結局 Rurality の変性は都市化という外生的因子によって振り廻わされた結果生じた応変の変化ではないかという疑が生ずる。

この点について，生活様式の面において可成り都市化の進んだ農村において，果してその都市化された生活様式が，今後長期にわたって農村の激しい風雪に耐え得るかという設問をかかげると，これを俄かに肯定することは出来ない。また平素，可成り都市的な感覚で行動する様式を身につけていた農民でも，一度水害や豪雪の如き災害に見舞われたりすると，俄然農民魂が甦みがえり，Rurality が再生することが今日でもあることを思い起すと，果して農民がその骨の髄まで都市化されたとみることは出来なくなる。世代にも関係はあるが，そこには，復元性の存在する余地が充分認められる。そして，このような復元力を，Rurality の≪残渣≫であると判ずることには些か抵抗を感ずる。

むしろ，このような現象は，長期にわたって形成された Rurality の中に何か重心の如きものが形成されており，それがたとえ，都市化の影響によって一時的に傾きが生じても，これを元の状態に復元しようとする力となって常に作用し，或いはこのような関係の中から，復元の可能性を支配する第三のポイントが形成されているのではないかと思われる。もし然りとすれば，この第三のポイントは所謂≪meta-center≫に当るものであって，復元力はこのmeta-center と重心との関係によってきまることになる。それが或る限界内にある時は，たとえ農村が如何に都市化の影響によって傾いたとしても，重心と復元力の連関的作用によって転覆することなく存続する。農村が変った

9）P. Sorokin は都市社会の農村化と，農村社会の都市化の現象を合せて，都市の差異が両側から少くなった過程を指摘し，これを≪両端よりの差異の溶解≫（melting of the differences from both ends）としている。

といわれながらも，なお何か変わっていないものがあると云われているのは，根本においてはこのような要素が介在しているからである。ここに我々はその中心にある≪meta-center≫の存在を Rurality との関連において考慮しなければならない所以がみられる。これを，ここではを Rurality を主軸として保たれる≪自律平衡化の作用≫としておく。

しかし，農村がこのような自律平衡化の運動を続けながらも，なおその Rurality を変えざるを得ないところに，Rurality の変性の本来の姿がみられる筈である。その変性の道程は時にゆるやかに長く，また時に激しく短かい。本研究で取扱った道程は後者に属する。しかし，我々は人類が狩猟時代より進んで農行為を身につけた段階から，現在に至る迄の長い期間は云うに及ばず，更に今後何百年か先にいたるまでの時間的経過のあとを振り返えってみて，農民の行為と意識と感得の様式としての Rurality にどのような変化が発現するかを丹念に考察する必要がある。将来のことは別として，既に現在にいたる迄，農村が様々なる外生的因子と結びつきながら，屢々その形態と行動様式を変えてきた事実を想起するならば，それは明らかに農村の≪meta-morphosis≫的現象であり，従ってまたその根底には，農民行動の≪meta-morphotic≫な特性が存在することを認めざるを得ない。

ここにおいて，Rurality の変性はこれを≪degeneration≫というよりはむしろ≪meta-morphosis≫という概念で説明する方がより適切の如く思われる。しかし，それはあくまでも農村が以前よりもより発展的に自己の特性を変えてきた場合に適用される概念であって，Rurality が退潮的に凋落して変性する場合は，これを≪Rurality の degeneration≫という方がより適切であろう。いずれにせよ，変性にはこのような二つのタイプのものが認められる。

以上，ここでは meta 概念の導入によって，Rurality の変性を説明する独自の論理の展開につとめ，また逆に Rurality の変性の実態の中に，どのような形で meta 的要素が介在しているか，この点を明らかにした。これによって複雑な変性の実態が可成り有効に説明出来ることになったと思われるが，このことは当然在来の Rural-Urban Continuum Theory に Meta Sociological な転回を施すことを意味することになり，従って，従来の連続体説はこれを≪the Meta-Continuum Theory≫として展開することが必要となる。

V ≪iso≫概念の投入による転回

この meta 概念による Rurality の変性の論理については，なお吟味を要することがらがある。それは Rurality の変性の実態に≪iso≫概念を導入した場合，この meta の論理が果してどのような対応を示めすか，この点を解明することである。

先づ，greenish な変化を meta-chromatic（変色）に把える場合，前述の如くそこに当然≪等色≫的な現象があらわれる状況が発現する。即ち農村と都市がともに≪meta-biolic≫に変化して，所謂≪変態共生≫を起した場合，その chromatic な変化が，共に greenish な色彩となって等色化することが起りうる。この等色化は色彩の≪iso≫化の現象である。然りとすれば，Rurality の meta-chromatic（変色的）な変化の過程から，≪iso-chromatic≫（等色的）な変化が生ずることになる。

都鄙の相互対応的な変化は，もとより社会現象であり，色彩の変色や等色化とはその本質を異にする。しかし，以上のような思考実験を通じて，iso 化による≪iso-chromatic≫な変化が，都市と農村の≪等色化≫であるとすれば，そこから都鄙一元化を説明する文脈を見出すことが出来るであろうか。

地域的に互に変色して結果的に等色化する現象があらわれたとしても，その母体が異っている場合はこれを絶対的一元化とみることは出来ない。このような現象を，我々は Community Solidarity の測定結果の中に屢々見出すことができる。所謂≪iso-metric≫な現象がそれである。即ち，二つ以上の現象のもつ特性が量的に変化する場合，或る点において両者が≪iso-metric≫になることがそれであり，このようなことは計量的には屢々起り得ることである。しかし，≪iso-metric≫な特性を，直ちに≪iso-chromatic≫なものとして表現してしまうと，それに到達するまでの過程の方向性が完全に捨象されてしまう。

たとえ形状や特性が同じであっても，その起源が異なる場合，それは≪iso-morphic≫な現象であり，従って，同じように都市化された地域や行動体系であってもその起源や源流を異にするものについては，≪iso-morphic≫なものとして，区別して取扱わねばならない。

ところで，≪iso-morphic≫に対峙する概念は，前述した≪meta-morphic≫という概念である。従ってここで問題となるのは，≪morphic≫をめぐって≪iso≫と≪meta≫が対決する形になり，これをどう解決するかという問題である。

Rurality の変性を解明する場合，この≪iso≫系の概念の活用と，≪meta≫系の概念の活用とはいずれも重要である。そもそも二分法的な両極概念が成り立つのは，この≪iso≫を原力としてはじめて極立可能なものとなるのであって，両極が互に相容れない相反的な極として成り立ち得るのは，このような≪iso≫の源流がその論理の基底に流れているからである。ただその≪iso≫化の原力が常に二つの極におさまるものとは限らないのであって，変動の状況によっては，極に分裂を生じたり，三極四極の多極化に向って iso することをさまたげるものではない。

これに対して，≪meta≫は≪beyond≫に近い意味をもち，屢々≪iso≫の状態を≪超える≫論理性を発揮する。Rurality の変性の如き微妙な現象を説明する場合，これを静態的にみる場合は，≪iso≫系の概念で可成り説明出来るが，動態的にみる場合は，むしろ≪meta≫系概念による説明の方がより的確の如く思われる。いずれにせよ，この二つの基調概念は，意味的には対比的なところがあるけれ共，しかし，もともと≪iso≫の状態にあった Rurality が，都市化・産業化の影響によってこれを超えて≪meta≫の状態に変化し，更にそれが主として外生的因子による変化であるために，新らしい高次の≪iso≫の状態にむかって変遷するという独自の連続する次元において発現する現象（運動）を解明する鍵概念として有効である。

かくして．従来の連続体説に≪meta≫概念と≪iso≫概念の二つの概念を投入することによって，本研究において把えた Rurality の変性をめぐる多くの分析的事実を説明する独自の論理の枠組の設定が可能になったと思われる。

VI むすび

本稿においては，5年にわたって展開した都市化にともなう Rurality の変性をめぐる一連の調査事実について，これを一貫して説明する論理の展開に

つとめ，これをもって一般化にかえることにした。

顧りみて，本研究の進捗のあとは，決して平坦ではなかった。

旧来の都鄙連続体説については，本研究の進行過程において，アメリカのミシガン州立大学に赴き，その後の発展のあとを尋ねたが，しかし，そこでは≪Integration≫の問題や≪Strategy for Rural Social Change and Social Systems≫の問題がとりあげられており，在来の≪Rural-Urban Continuum Theory≫を一段と発展させたような理論は殆んど求めることが出来なかった。ただ，そこで得た成果は上述の如き発想にもとづく新らしい連続体説の構築の基調であった。

そもそも，存在するもの，ことに社会的存在はそれ自体連続性をもつものであり，それはリニアな線上において発現する連続体を超え，また集合体における連続性を超えてた多次元的な空間における連続体として発現する可能性をもっている。都鄙の連続性もまた然りであって，これを横に列べてリニアな線上で連続体とする発想をもってしては，Rurality の変性の如き微妙な現象を充分説明することは出来ない。

むしろ，都鄙を上下にオーバーラップさせ，それに光をあてて投射した場合，そこにあらわれる形相と色相の同時発現的な多元的変化こそ，Rurality の変性の実相をより忠実に表現していると云わねばならない。この現象を説明するためには，従来の連続体の概念に≪meta≫の概念を投入し，都鄙は共変するものとして，その共変の諸相を新らしい meta-continuum の概念によって説明することが望ましい。しかし，人間の社会には常にまた≪iso≫化の原力が根源的に働いており，情況，環境，条件によって様々な形態をとりながら≪iso≫化する傾向がある。集合体が集団として成り立つのは，このような≪iso≫の作用によるものであり，人が他者との関係を断ち切って≪iso≫するとき，人は孤立（isolate）して社会的に存在出来なくなるから，存立の為には幾度か次元をかえて≪iso≫を試みるのである。

都市化・産業化の衝撃によって変容した都市と農村は，かくして新らしい≪iso≫の状態に向って進むものとみられるが，いずれにせよ，≪meta≫と≪iso≫の両概念の投入によって，新らしい状況の説明が可能になり，かつまた都市化社会の分析的道具としてその有効性を期待することが可能になる。ここに本研究の成果の一つがある。

しかし，本研究にはなお残された若干の問題点が認められる。いまその主なるものを列挙すると次の如くである。

(1) リニアな線上にあらわれる連続体については可成りの吟味を施したが，平面にあらわれる連続体について，とくに Rural-Urban Fringe との関連において，その考察の結果を充分明らかにする余白がなかった。この点については改めて論述する機会を得たい。

(2) ≪偏在変性≫や≪ホメオスタシス≫≪退行的進化≫≪差次感受性≫≪変態共生≫等々生物学的な諸概念の援用を屢々試みたが，結論を急ぐあまりに，それぞれの概念の定立を証明する一々の事実のつけ合せを行う余裕がなかった。この点については，今後，本研究によって得られた調査事実ばかりでなく，それ以外の内外の会会的事実や情報をも素材として，改めて確認を展開する必要が認められる。また，これによって，生物学的概念より，新らしい社会学的概念の設定も可能になるものと思われる。

(3) meta 理論の展開については，その論理自体が社会学的に可能であることを調査事実によって証明しなければならないばかりでなく，従来の社会学の諸理論の中にもこれに該当する論理が散見されるところからして，一連の整序を行う必要がある。前者については紙幅の都合上，その対応化を省略したが，後者については今後の新らしい課題として検討しなければならない。

(4) 本研究において，Rurality は，これを≪生産≫と≪生活≫と≪文化≫の三つの領域における行動特性として取扱ったが，その変性を把えるに当っては，≪生活≫の領域における事実に主眼をおいてきた。しかし，この領域における Rurality の変性は，当然≪生産≫と≪文化≫のエリアにおける変化と有機的な関連をもって発現するものであり，従ってこの関連を綿密に解明することが必要である。ことに≪文化≫のエリアにおける変性の事象は，≪meta≫と≪iso≫の概念の投入によって，可成りユニークな解明が可能になるものと思われる。しかし，この点については本研究では殆んど触れることが出来なかった。

また，これら一連の Rurality をめぐる変性が全体社会とどう関連するか，その社会史的背景や体制的関連についても論及するいとまが殆んどなかったばかりでなく，諸外国における Rurality の変性の事実についても比較検討する余裕が全くなかった。これらの問題の解明についてはなお今後の課題とし

なければならない。

以上の如く，本研究には残された問題点が多々認められる。しかし，序文にも述べた如く，現今の社会情勢の状況からして，ここで一応の取りまとめを行っておくことは，今後の農村の変動の趨勢を見極わめる点からしても，さらにまた農村を今と昔という形で比較分析を行う点からしても，極めて有効と思われるので，ここで本研究に一応のピリオドを打つことにした。

5ヶ年にわたる本研究を展開するに当って，多くの方々からご教示とご協力を得た。とくに農業史の分野では，本学林善茂博士から再参有益な助言と教示を得た。また生物学の分野では森樊須博士から，the meta-continuum theory の展開に当ってはミシガン州立大学 A. G. Beegle 博士をはじめ，都市社会学の G. Trout 博士，農村社会学史の C. R. Hoffer 名誉教授，ルイジァナー州立大学の A. B. Bertrand 博士，カリフォルニア・サンフェルナンド大学の M. Iga 博士その他多くの方々より懇切なるアドバイスと賛同を得た。また本研究のための実態調査に際しては，北大農学部農村社会学研究グループ，文学部社会学専攻の各員のご協力を得たほか，調査地点である大野町，北広島町，苫小牧市王子社宅，函館市東川小学校，東川町の各位より理解あるご協力を得た。一々ご芳名は記さないが，これらの方々のご助言とご協力とご支援がなかったならば，本研究は到底このような成果を修め得なかったと思う。末文ながらここに記して衷心より謝意を表したい。

1975．10．12

（尚，本研究は「昭和45年度文部省科学研究補助金交付一般研究課題」である。）